

## カントに於ける „Transzendental-Philosophie“ の 理念に就いて

今 津 鶴 雄

### 緒 言

歴史的に、現に我々に與えられているカントの哲學もさること乍ら、本來彼が意圖した、でもあろう哲學の本質は、如何なるものであつたろうか？ 換言すれば、カントがその八十年に亘る生涯を捧げて探究しようとした「Hauptproblem」は如何なるものであつたろうか。

此の問題はカント哲學の觀方に依つて様々な形をとり、事實又、從來色々な立場から、多種多様な解釋がなされて來たのである。

然し乍ら私は今茲に、そうしたカント解釋者の業績を靜かに回顧し、而も謙虛なる反省を加えつつ、多くの諸先輩の教示に基いて、私の執らんとしたカント解釋の基本的立場は、次の如きものである。即ち彼の「最高の立場の先驗哲學」„Der Transzendentalphilosophie höchster Standpunkt“ (Kants Opus postumum herausgegeben von Artur Buchenau, Erste Hälfte (Convolut I.) Berlin und Leipzig. 1936. S. 32.) が終始一貫して、其の徹底的究明に努めたのは「神」・

「世界」及び「我」の問題に他ならなかつた。本論文の表題を『カントに於ける „Transzendental-Philosophie“ の理念に就いて』と題した所以である。まことに我々は R. Schmidt と共に、カントこそ古來の如何なる哲學者にもまして、文字通り „ein Philosoph“ であり、„ein Weltweiser“ であり、彼の哲學に此の様な實踐的性格を持たしめたものは、單にその „Methode“ のみに在るのではなくして、寧ろ第一に、彼の抱いた „Probleme“ にあつたといふ事に思いを致さざるを得ないであらう。(Vgl. Raymond Schmidt: Die Drei Kritiken, 1952. Vorbemerkung, S. 3) 斯くの如きカント解釋の基本的方位に於て、豫め此の論文の意圖する所並びに其の内容を簡潔に述べて置くならば、夫れは次の如きものになるであらうか。即ち一言にして云えば、カント哲學に於ける重要概念である「批判」・「先驗哲學」・「形而上學」等の諸概念の發展乃至は展開を、換言すれば是等のものの内面的な諸關係を、彼の最晩年に於ける Opus postumum の「最高の立場の先驗哲學」から考察せんとするものである。而して私は其の究明の手掛りを先ず、カントの掲げた哲學に關する二種 of 概念 (理解) 即ち „Schulbegriff“ と „Weltbegriff“ に求め度い。

### 一 カントに於ける哲學の概念の一般的考察

周知の如く、カントは所謂「批判期」に於て新しく哲學に關する二種 of 概念を措定した。即ちその一つは、彼が哲學に關する「専門學術的概念」(ein Schulbegriff der Philosophie) 又は「専門學術の意味に於て」(in sensu scholastico) と呼んでゐる所のものとあり、今一つは、哲學の「全人類的概念」(ein Weltbegriff der Philosophie) 或は「全人類の意味に於て」(in sensu cosmopolitico oder cosmico) と稱してゐる所のものが夫れである<sup>(1)</sup>。而して、カントに依れば前者は要するに「概念に依る理性認識の體系」(Z. B.; Kant's Vorlesungen über die Metaphysik,

herg. von Pöltz. neu. herg. von H. Schmidt. 1924. S. 1. S. 2.)であり、後者は「人間理性の究極目的の學」(ebenda.)を指すものであつた。これが批判哲學時代のカントの掲げた一般的な定義であつたと思われる。ところで此の表現だけをみるならば、極めて容易に理解し得るようであるが、然し是に依つてカントは一體、如何なる性格の哲學を我々に示そうとしたのであるか、——と云う其の意味する所、乃至はカントの意圖を探る段になると仲々困難なように思われるのである。そこで此の定義の眞意を理解せんが爲に、『純粹理性批判』或は Pöltz に依つて傳えられた『形而上學講義』更には『論理學』等に見受けられる是に對するカントの直接的言及を吟味してみると、「理性認識の體系」として示された哲學の Schulbegriff とは、要するに哲學が如何なる種類の認識體系を以て成立しているものであるか？ 換言すれば哲學とは如何なる知識の把握に依つて達成せられる認識であるか、と云う事を學問的形式を以て示そうとしたものと考えられる。『純粹理性批判』に於ける次の如きカントの言明は、まさしく此の點を物語るものの一つであらう。即ち、Schulbegriff とは「學問としてのみ索められ、この知識の體系的統一、従つて認識の論理的完全性より以上の何ものをも目的とせざる認識體系の概念である」(B. S. 866)と。然るにカントに依れば、哲學という名稱の根柢にはこの Schulbegriff の他に、尙「人間の全使命」(K. d. F. V. B. S. 868.)とも稱すべき凡ての人々の關心事が潜んでいる。此の見地に立つてカントは、哲學を「人間理性の本質的目的に對する凡ゆる認識の關係の學」と考えたのであらう。斯くしてカントは是等二概念を嚴格に區別することに依つて、「前者の觀點からすれば、哲學とは熟練(技倆)の教養(eine Lehre der Geschicklichkeit)」(Logik : Ak. (IX) S. 24)であり、此の意味で數學者、自然科學者及び所謂論理學者は悉く「理性技術家」(Vernunftkünstler)に過ぎないのに對して、「後者の觀點に於て、哲學とは智慧の教養(eine Lehre der Weisheit)であり、理性に法則を與える者である」と語り、少し置いて更に「實踐的哲學者——即ち教養に依つて、又實例を通じて智慧を教える人——こそ本來の哲學者(der eigentliche Philosoph)なのである。哲學とは全き智慧の唯一の理念であつて、これが、我々に人間理性の究極目的を示すのであるから」

(*obrida*)と述べているのである。

茲に我々は『純粹理性批判』に於て定立されたカントの哲學に關するかの二種の概念(理解)の發展を觀ることが可能であろう。即ちカントは、後年の『論理學』(一八〇〇年)の緒論に於ては、右の如く哲學に就いて前者の概念を拒けて、後者の概念(*Weltbegriff*)を力説しているのである。此の事は、既に『純粹理性批判』に於て措定された哲學の *Weltbegriff* と、彼の所謂「目的の立場」とこそが、哲學の理解に對するカントの積極的態度を我々に明示するばかりでなく、『論理學』に於ては更にこれを發展せしめて、後者を以て *Schulbegriff* の基盤と爲すと同時に、哲學に「品格」(*Würde*)を與え、更に一切の知識に始めて「絶對的な價值」(*einen absoluten Werth*)を與えるものであるとまで、此の *Weltbegriff* を高調力説しているのである。然し乍ら、此の場合我々の注意すべきは、このよ  
うな意味に於ける哲學者及び哲學はカントにとつては理想であり、理念であつた事であろう。夫れは右の引用文の中にも、我々の容易に看取せる所であつた。従つて此の點に關するカントの意圖は、哲學に於て所謂「*Schulbegriff*」を無視することでもなければ、又兩概念の無關係を主張せるものでもなく、哲學がその「*Weltbegriff*」に従つて「人間理性の本質目的の立場から」如何なる統一的體系を規定するかを、人間理性に即して詳細に規定せんとした點に存するものである。事實他面に於てカントでは、かの二種の概念の密接不離なる關係が、充分に看取されるのである。蓋し單に「熟練の教え」と云うのみでは、假令認識を體系づける上での技術は見られても、理性使用の指導原理を缺くが故に、カントの所謂「理性技術家」乃至はソクラテスの所謂「*Philodox*」に陥るからである。

かと云つて「智慧の教え」と云うだけでは、その場合は探究の理念又は目標を有するにしても、そのみでは尙無方法的な漠然たる主張に止るであろう。カントに依ると此のような方法的根據を缺く知識は、かの獨斷論的理性輕蔑者(*Misolog*)のそれと區別する事の出來ないものであつた。(Vgl. *Logik*: S. 26. *Vorlesung*, II. d. *Metaph.*, S. 5.) 「兩概念は合一しなければならぬ。學的認知なしには (*ohne Kennntnis*) 決して哲學者となることは出來ないが、然し

知識のみでは、哲學者と云われぬ。斯かる熟練知の合目的統一、即ち最高目的に向つて此の知を合致せしめるだけの洞察力が、存しなければならぬ」(Vorlesung u. d. Metaph., S. 4 f.) とカントの語る所以である。

以上述べられた所に依つて、我々はカントの所謂 „Schulbegriff“ の哲學と „Weltbegriff“ としての哲學の有する大凡の意味を理解し得るものと思うが、然し問題は寧ろようやく其の手掛りを獲たと云うに止るのみであろう。と云う意味は、抑々是等の概念規定の中核であるカントの所謂「究極目的」とは何か？ その把握と達成とは如何なる事であるか？ 更には「概念に依る理性認識の體系」のもつ方法的意義は何を指すのか？ ——等々の問題を、我々は充分に解明したとは云い得ないからである。此の點を明瞭ならしめる爲に我々は、カントの論じた哲學的認識(形而上學)の特異性を、純粹數學乃至は純粹自然科學との關聯に於て考察して見度いと思ふ。

さて、所謂「批判期」に於てカントが、數學的認識に異常なまでの關心を寄せた所以のものは何であつたらうか。此の點に關しては色々な事柄が指摘されるであろうし、又事實カントを以て、數學的認識の基礎づけを試みたとみる人々もあつたのは、吾人の周知の所である。それにも拘わらず此の點に關するカントの意圖は、全く「方法的意義」に存したものである。即ち、カントは「數學的認識からその秘密をはぎ取る」(R. Schmidt; Die Drei Kritiken, S. 80) ことに依つて、この認識が有する純粹綜合判斷の妥當性の權利根據(Rechtsgrund)を發見したのである。

カントがその批判期に於て、哲學的乃至形而上學的認識が「概念に依る理性認識」と云う根本的性格を有するのに對して、數學的認識は、「概念の構成に依る認識」と結論したかの一般的定義の意味する所も亦、結局は右の點を意圖したものに他ならないであろう。蓋しカントに於て概念の構成とは、「概念に對應する直觀を先天的に描出する」(K. d. r. V., B. S. 741) ことであり、「概念を経験によらずに表出す」(Vorlesung u. d. Metaph., S. 2) ことであつた。斯くしてカントは、純粹數學の中に經驗から獨立した綜合が事實的に(wirklich)存することを看破する事に依つて、

哲學の領域に於ても、かくの如き先天的綜合判斷を見出し得ないものかと考えたのである。即ち、カントは數學の有する根本的な學問的性格——„Gewiſſheit“ 〃 „Deutlichkeit“——を洞見することに依つて、斯かる數學的認識の合理的證明方法を „Vorbild“ 〃 „Vorbild“ —— R. Schmidt の言葉を以てすれば——新しき形而上學の則るべき「處方箋」 das Rezept を探究する點に、哲學的（形而上學的）認識と數學のそれとの相違を論じた根本的意義を求めたものと考えられるのである。(op. cit. S. 80 f.) 従つて、カントに於ける此の兩認識の相違に關する考究は、哲學の學問性 (Wissenschaftlichkeit) を確立せんとする上で重要であつたのみでなく、その究極的意圖として我々は、カント自身の批判哲學を可能ならしめた所の、「批判的方法」の樹立に直結する根本的意義を見逃してはならないであろう。此の意味でカントが『純粹理性批判』の第二部に於て、「先驗的方法論」を展開したことは何よりも先ず、カント自身の意圖した哲學の性格を究明する上に於て、更には彼の體系に於ける全發展の必然性を内面的に把握せんとする上からも、今後もつと一層の關心が拂われてよいものと考えるのである。殊に最近の、哲學に於ける「論理實證主義」の動向に注目する場合、カントが『純粹理性批判』の最後に此の「方法論」を收めたことは特筆に値すると共に、深き興味と敬意を表さざるを得ないのである。數學的認識の秘密を奪ひ取つたカントは、哲學的乃至は形而上學的認識の領域に於ても、我々が先天的綜合判斷を相對的に (relativ) もち得ることを證明したのであつた。此の „Rezept“ に則つて、これ以後は純粹悟性、經驗から獨立した認識乃至は先天的綜合の妥當根據に於て、少くとも我々は安んじて此の權利根據が及ぶだけ、恰度それだけの範圍に於て其の限界にふさわしく、出来るだけ高くして堅固な建築物を造り度いと考え、又その爲の方法を探究すべきであらう。徒らに、高遠複雑な理論を以つて我々を遠くへ誘導しておき乍ら、而も我々の信賴に足る「方法論」を與えることの稀なる哲學者の中にあつて、カントの「方法論」のもつ意義を更めて見直すことの必要を強調するのは、我々の誤れる見解と云うべきであらうか。

さて續つて思うに、右の兩認識に關するカントの論究は他面又、彼の哲學の本質論に密接なる繋りを有している。

既に哲學の „Weltbegriff“ を以て「人間理性の究極目的の學」と規定されたことが、此の點を暗示していたものと考へ得る。周知の如くカントに在つては、哲學は是を主觀的方面から觀ても、或は客觀的側面から觀ても、共に「學ぶこと」は出来ないと結論された。即ち、前者の觀點に於て、學び得るものは要するに「歴史的・主觀的」(historisch-subjektiv) に止り、その限り夫れは與えられたものの模倣に過ぎないとして、此の認識を哲學の領域から斥けているのである。(Vgl. Logik: S. 23 ff.) カントは此の點に於ても、亦哲學と數學との根本的相違に着目したのである。蓋し數學は特殊な超感覺的認識であつて、「既に出來上つた一つの訓練として我々に呈示されたものを、記憶乃至は理解力に印象づけること」(Vgl. R. Schmidt; op. cit. S. 73 f.) に依つて學び得るものであり、且つ學んで而も理性認識たるを失わないものである。これが所謂「概念の構成」としての數學的認識の本質的特長であつた。茲に至つて Schmidt は次の様に述べている。「それ故に哲學をも學ぶ爲には何よりも先ず第一に、一つの哲學が現實に存在していなければならぬのである。」(op. cit. S. 74) 然るにカントは、「その様な哲學は何處に存在するのか? („Wo ist sie?“) 誰がそれを所有しているのか? (Wer hat sie im Besitze?“) (K. d. r. V., B. S. 896) と直ちに反論してゐるのである。従つて我々は右の論述の中に、批判期に於けるカントの抱いていた哲學の本質と課題に關するその見解が何であつたかを洞見し得ると共に、カントの此の様な見解は何れかと云えば、彼が將來成長發展せしめんとする哲學の理念と云われるべきであらう。

他方客觀的方面からみた哲學とは、カントに依ると哲學的認識の體系であつて、夫れは「哲學する總ての試みを批判する原型」(das Urbild der aller Versuche zu philosophieren) を意味し、之に依つて様々な主觀的哲學が評價されるのである。カントに於ては是が眞に客觀的に妥當性を有する究極の哲學であり、かの「人間理性の本質目的の學」即ち哲學の „Weltbegriff“ に他ならないのであるが、此の様な哲學は既述の如く、理想であり理念であつて、具體的現實的には未だ何處にも與えられていないのである。それ故にカントに依ると、哲學することを學ぶとは、

「哲學せんとする試み」を「範型」„Vorbild“として、理性を使用してみる「練習」(Übung)に過ぎないのであり、眞の哲學的認識は自らの理性原理そのものを、其の源泉(Quellen)に於て自發的に使用することに依つてのみ到達し得るものと見做してゐる。(Vgl. K. d. r. V., B. S. 866) 従つてカントの所謂「眞の哲學」とは„Schulbegriff“や„Weibegriff“と云つた抽象的形式的規定を越えて、各人が自分の足を動かして歩いてみる時に始めて獲得される意味での認識を意圖していたものと考えられる。

此の意味で「夫れへの歩道„Fufsteig“”(ebenda.)の發見こそ、哲學の理念を實現する道であり、是が彼の所謂„Kritik“の事業に他ならなかつた。哲學の„Weltbegriff“と云ふ、或は「人間理性の本質目的の立場」と云ふ、結局は斯くの如き哲學の理解に對するカントの積極的態度を、我々に明示せんとするものであらう。「總ての哲學的思索家は、謂わば他人の廢墟の上に更に自分自身の作品(哲學)を構築するのであるが、然しその總ての部分に於て恒常的である様な状態に、到達し得たものは一つもなかつたのである」(Logik: Ak. [IX] S. 23)と語る『論理學』の言は、單に理念としての哲學がその本質上、當然現實的に存在し得ない事の主張に止るのみでなく、カントは是に依つて從來の哲學の業績に對する強烈なる否定的態度を大膽率直に表明すると共に、自己の「先驗哲學」に對する大いなる自信或は抱負を主張したものと考えられる。「哲學的認識の大部分は宿命的に憶見である、そうして夫れは暫くして消えて行く蜃氣樓の如きものである。哲學的認識は消え去るが、然し數學は存續する。形而上學は人間の凡ての見解の中で最も困難なものである事は疑いのない所である、が併し斯る形而上學は今に到るまで一つも書き残されてはいない」——此の様にSchmidtが語る。(R. Schmidt. op. cit. S. 73) 抑々カントがその「批判期」に於て、從來の古き傳承的形而上學に對して不信の念を抱いたのは、此の學の根本確信(Grundüberzeugung)に對してではなくして、却つて寧ろ、形而上學の思辯的證明方法に對する不信であつたと考えられる。(Vgl. R. Schmidt: op. cit. S. 80) 是を稍々詳しく云うならば、カントの積極的態度とは、古き形而上學の思辯的證明方法を根本的に改革する事に依つ

て、形而上學の根本的確信を方法的學問的に新しく生かすこと、即ち從來の傳承的形而上學を歴史的學問や數學の如く、考へ得る學問に改革する事に依つて純粹數學の有する合理的證明方法を Vorbild として、新しき形而上學の證明方法を探究せんとするカントの方法論的意圖を指すものと理解し得るのである。従つて、カントでは „Weltbegriff“ としての哲學が結局は永久の課題であり、理想であつたにしても、彼自身は將來學問として人間の歴史に現われるであらう所の形而上學建設の爲の方法、即ち „Kritik“ 乃至は所謂 „Rezept“ を以つ、此の理念自體を或る意味に於て實現せんとする意圖を抱いていた事は否定し得ない所であらう。してみれば、カントに於て理念として考へられた哲學と、右の如く „Kritik“ 夫れは一方に於て形而上學の批判であり、他方之の認識批判の意味での認識論に繋る——を通じて現實に實現し得るものと考へられた其の哲學との關係は、既述の „Schulbegriff“ の哲學と „Weltbegriff“ の哲學との關係と同様に密接不離なるものである事も亦、我々の容易に理解し得る所であらう。夫れ故に彼は最晩年の『遺稿』の中で、「哲學 die Philosophie (智慧の教え „Weisheitslehre“) がドイツに於て世界智、Weltweisheit と稱せられるに到つたのは、智慧、即ち世界智の此の學は究極目的 (最高善) を目指すものだからである」(Opus postumum, I Conv.) と語るのである。恐らく是が哲學の本質に關するカントの究極の結論であらう。茲に於て我々は理念としての哲學が、カントに於ては直接的には先ず『實踐理性批判』に繋ること、而して、所謂 „Weisheitslehre“ とは彼の「究極目的」と切り離し得ないものであることを知るのである。而も周知の如く、カントに於て此の究極目的とは「最高善の理想」を豫想しており、その場合所謂「最高」(das Höchste) 乃至「最上」(das Oberste) と「完全」(das Vollendete) の意味であつた。カントに依ると、此の様な實踐理性の眞の對象としての最高善は、實踐的に可能であると主張する (Vgl. K. d. p. V., S. 206f.)。かの『遺稿著作』に於ける「凡ゆる知識の究極目的 (最高善) は、其れ自身最高の實踐理性に於て認識され得る」(Opus postumum, I Conv.) と語るカントの意味も、此の事を物語るものである。

以上述べた所に依つて我々は、極めて大まかな論述ではあつたが、カントに在つては「理性認識の學」たる哲學の究極的對象も亦「最高善」に歸着し、従つて哲學は學としての「最高善の教え」と規定されたものと考へ得る。而して此の様な最高善に關する知識が、カントの所謂「Weisheit」なのであるから哲學の究極的概念が彼に於て又、「Weisheitslehre」として確定された所以をも一應理解し得るものと思う。此の様な意味に於てカントの意圖したてもあろう哲學とは、結局この「Weisheitslehre」と云う性格のものであり、而も其の場合の「Weisheit (Gegensatz)」とは、人間にとつて同時に學であらねばならない様な哲學を意味したのではなかつたろうか。即ち夫れは哲學の「Schulbegriff」や「Weltbegriff」が、渾然として一體となつた様な構造を有するものであり、謂わば夫れは「講壇哲學」(Schulwissenschaft) や「生の哲學」(Lebensweisheit) としての哲學の間の不斷の闘争であり、或る意味に於て我々の「精神生命」(Geistesleben) の Form や Inhalt の間を、謂うならば Denken と Leben との間を、絶えざる闘争を意味するものとも考へ得るであらう。(Vgl. Karl Joël; Kant als Vollender des Humanismus. S. 39f.) 此の様な哲學こそ、カントの所謂「最高の立場の先驗哲學」の有する根本性格に他ならなかつたと考へる。而もカントに依れば、斯かる「先驗哲學」の實現に向つて不斷の努力精進を續けることは、人格的存在者に課せられた義務でさえある。即ち曰く、「而して此の究極目的は到達し得られるものである限り實に義務であり、又逆に究極目的が義務であるならば、夫れは又到達され得るものでなければならぬ、而も行爲のかかる法則が道德的と云う意味なのであるから、智慧は人間にとつて道德法則に従う意志(その對象は何であれ)の内的原理に他ならないものとなる」(Verkündigung des nahen Abschlusses eines Traktats zum ewigen Frieden in der Philosophie. 1796. Cr. [VI] S. 508) といふ様にカントは一七九六年の一論文の中で語つてゐるのである。彼自身、その餘命幾何もなき老境をひし／＼と感じたであらう此の論文で、彼は同じく、哲學とは既に其の名稱の示す如く「智慧の探究」、「Weisheitsforschung」であると説明してゐる。我々は今この見地に立つ時、かつてカントが純粹知的要求の立場から、哲學への不斷の探究を以つて所謂「必然性の不可

抗的法則」*„das unwiderstehliche Gesetz der Notwendigkeit“* (Prolegomena, philos. Bibliothek Band 40. S. 143)乃至はかの「斥けん」と欲して斥け得ない特殊な運命」を擔う人間理性の、「拭い去る事の出来ない形而上學的衝動」*„un-auslöschlichen metaphysischen Trieb“*に基く、と爲したものを今や *„Welbegriff“* の立場から見直して、究極目的の立場に於て、哲學とは「智慧の教え」であり、而も義務としての「智慧の探究」として更めて説明を加えたものと思われる。斯くしてカント自身の、あの晩年のやむことなき眞に骨身を削る様な探究道の根柢には、普通の意味での單なる知的要求の他に、或る何らかの人間の義務としての、この様な道德的感情も含まれていたものとみるのは、我々の誤れる推察であるだろうか。

## 二 批判哲學の概念と其の構造

さて、以上の如き謂わば「序論的考察」に於て我々が究明に努めた所の哲學の *„Schulbegriff“* 並びに *„Welbegriff“* は、そこで明らかにされた如く、カントに於ける哲學の概念（理解）の一般的な考察であるが、では哲學者カントは斯くの如き哲學の定義を提げて、具體的には如何なる哲學を求めたのであろうか？ 此の重要な設問に應えんとするものこそ *„Welwaiser“* カントが、彼自身の批判哲學の性格を簡明に云い表わす爲に用いた、「批判」・「先驗哲學」及び「形而上學」等の諸概念、就中その *„Transzendental-Philosophie“* が内に深く包藏する根本問題と云うべきであらう。

先ず三批判を含めた意味での所謂 *„Kritik“* に對して、カントの期待した職能乃至任務は、云う迄もなく學としての「形而上學」に對する「前提的探究」(Propädeutik)であり、「豫備的事業」(Vorbereitung)であつた。是がカントに於ては此の學（批判）の概念の基調をなすものであり、彼は先ず以て「批判」の本質的意義を此の點に求めたもの

と考へ得る。斯くの如き「Kritik」の、カント哲學全體に對する位置づけに關して、大要次の如き注目すべき解釋が R. Schmidt に依つてなされてゐる。即ち彼に依ると、カントにとつて「批判の仕事」は、「世界を包む精神」(weltumfassenden Geist) が歩む道に於ける唯一の、而して決定的な段階とされ、此の様な精神の諸々の意味に於ける一つの駐屯所(eine Etappe)が「批判」の任務であり、而して三批判(Kritiken)は、より高き哲學的目標に到達せんとする手段にすぎない、と云い切ると同時に、「カントは單なる認識批判家ではなかつた。却つて夫れである事を超えて世界解釋者(Weltdeuter)であり、就中、批判的神探究者(Gotsucher)であつたのである。……かうした事實を見逃す人々が、カントを誤解するに違ひないのである」(Vgl. R. Schmidt; op. cit. Vorbemerkung, S. 3~4)と語る彼の論述の中に、我々はカントに於ける「Kritik」の本來的な位置を明確に洞見し得ると共に、此の様な「批判」の適正な位置づけと其の任務を理解把握することが、カント解釋の上で如何に重要な事であるかを我々は Schmidt に依つて充分示唆されるであらう。斯くして我々は、カントに於て右の「豫備的事業」が達成された後には、當然「形而上學」の建設に向うべき必然性を此の「Kritik」が擔つていた事を明確に洞見する事が出來よう。「形而上學は茲に於て夫れ自身、純粹理性批判の完成の後に建設され得、又建設されねばならない體系としての一つの學の理念に他ならぬ」(「Welches sind die wirklichen Fortschritte, die die Metaphysik seit Leibnizens und Wolffs Zeiten in Deutschland gemacht hat?」1794. Gr. [VIII] S. 296)とカントの語る所以である。

次にカントに依ると、「Kritik」は「transzendental」な認識である。此の點に關して彼は、例えば『純粹理性批判』A版の「序論」の中で、純粹理性批判は先驗的認識ではあるが、夫れは先驗哲學の一つの部門である、と語つてゐる。然るに、我々の觀た如く、先には「批判」は學としての「形而上學」——従つて「Transzendental-Philosophie」——の豫備的部門と見做されていた。では我々は此の關係を如何に考へるべきであらうか？

問題は「transzendental」の有する意味に關わるであらう。カントは之に關して次の様に語つてゐる、即ち「對象

にはなく寧ろ對象一般を我々が認識する仕方―夫れが先天的に可能なるべき限りに於て―に關するところの凡ての認識を私は „transzendental“ と名づける」(K. d. r. V., B. S. 25) と。之に依つて明らかな様に、先天的認識の仕方 (Erkenntnisart) に關する認識を成立せしめる方法的根據の究明が、カントの意味する transzendental な認識なのである。従つて、先天的認識は如何にして可能であるかの探究、換言すれば此の種の認識を可能ならしめる方法的根據である所の、理性能力の吟味や限界付けを任務とする „Kritik“ は、確かに „transzendental“ な認識であると云うべきであろう。茲に於て我々は、カントの所謂「先驗哲學」も亦、此の意味での先驗的認識たる事を了解し得るのである。斯くして我々は、「批判」と「先驗哲學」との間の、相互不離なる關係構造を明確に洞察し得るのである。從來の解釋では「批判」はそのまま「先驗哲學」と identisch に解せんとされる傾向であつた様に思われるが、我々の觀る所ではその様に eindeutig に決定されない様に思われるのである。そこには右に示唆した如く、此の兩學の相互移行的本質構造が見落されているのではなからうか。換言すれば、カントは何故に „Kritik“ を „Transzendental-Philosophie“ の Propädeutik として説明しなければならなかつたか?―の必然性の究明が缺けているのではなからうか。成程、カントの語る所に依れば「先驗哲學とは先天的なる人間認識の諸要素 (Elemente) や諸原理の哲學」(Vorlesung, ü. d. Metaph., S. 46) であり、斯かる先天的認識の「範圍並びに其の知識の限界を述べる學問が先驗哲學」(Opus postumum ; I. Convolut., V. Bogen, 3. Seite) なのであるから、認識内容の性質からみるならば、此の兩學は區別がないとも考えられよう。然るにカントは事實に於て明らかに、此の兩學を直ちに同一なるものとは爲していないのである。カントに依れば、「先驗哲學」とは先ず「先驗的認識の體系」を意味し、その限り「全先天的人間認識」の總ての分析を含むべきであるが故に、「純粹理性批判は未だ此の先驗哲學とは云えない」(K. d. r. V., B. S. 27) のである。此の様にして、『純粹理性批判』に於けるカントの態度は、少くとも學としての體系 System を完備せんとする立場に於て、兩學を直ちに同一なるものと見做していない事は明かである。

然し乍ら他方、此の「先驗哲學」の方法論的見地から觀るならば、我々は此の區別がそれ程著しいものではない事に氣付くのである。成程、『純粹理性批判』は單に先天的綜合認識の充分なる評價に必要なだけの範圍に限られてはいる。けれども斯くの如き批判の探究に依つて、先天的認識を構成する諸要素の分析、乃至は純粹認識の基本概念等が論じ盡くされているが故に、「此の本質的意圖に關して何ら缺くる所がなければ」後に到つて是以外の要素は「容易に補われ得る」(Vgl. K. d. r. V. B. S. 28)ものである、とカントも論じている。此の様なカントの主張は、尙明確とは云い難いにしても、彼の意圖を察すると純粹理性批判が、實質的には所謂「先驗哲學」と殆ど區別のないものと考へ得るのである。換言すれば、是を發生の過程から云えば「批判」は「先驗哲學」の Propädeutik であり、其の意圖からみれば純粹理性(即ち Kritik)を徹底して行けば、自らその "System" 即ち "Transzendental-Philosophie" になる、従つて兩者は表裏一體の關係である、——この様にみるも恐らくは大きな誤りではないであらう。斯くして我々は純粹理性批判が「先驗哲學」の一部門と云うよりは寧ろ、批判の完全なる追求、その徹底化が自ら「先驗哲學」になるものと解する事が出来、此の意味でカントの所謂「批判的事業」なるものと "Transzendental-Philosophie" の名で呼んで差支えないことを知るのである。

次に "Kritik" と "Metaphysik" の關係は如何? 先に述べた様にカントでは「批判」を遂行するのは、結局此の「形而上學」に到達せんが爲であり、哲學的探究の最後の目的も亦、この學としての「形而上學」の建設という事に在つた。批判期に於けるカントが哲學した其の課題は、何らかの意味で「形而上學」であつたと云い得るのであらう。まことに、カントが「形而上學」こそ本來的な哲學であると云う強き確信に生きていた事は、彼の全著述を貫く歴然たる歴史的事實であると云つても過言ではないであらう。それ故にカントは、「形而上學」なる概念を哲學なる概念と同義に解している。例えば、「形而上學こそ、本來的な眞の哲學である」、Metaphysik ist eigentlich, wahre Philosophie! (Logik; Ak. [X] S. 32) と語る『論理學』の言は之の直接的言及であらう。或はこれを「カントの用

いた比喻を以てすれば、「全く雑草の繁茂した一つの土地を淨め平らかにする」(K. d. r. V., A. S. XXI) 仕事が成就し、此の „Bodens“ の上に、學的に可能な先天的認識や純粹概念を悉く探し整えて組み立て、一大殿堂の建設を試みるのが „Metaphysik“ の本務とする所であつた。「批判」と「形而上學」とが此の様な關係に立つものとすれば、後者は前者に依つて船を自由自在に操縦し、その目指す目的地に到達する事に他ならないであらう。(Vgl. Prolegomena: philos. Bibliothek. Band 40 S. 9.) 此の意味に於て、「批判」を手段として到達せんとする「形而上學」とは、既述の序論的考察に於ける人間の究極目的に對する「智慧の教え」に他ならないものと考へ得る。即ち理性的存在としての人間が、究極目的の實現に向つて合目的な生活を進める場合、是が指導の原理となる知識の體系こそ、「形而上學」に他ならない事が了解される。それ故にカントは „Metaphysik“ の概念を規定するに、「純粹理性によつて所有する凡ての財産の、體系的に整頓された財産目録 „das Inventarium“」(K. d. r. V., A. S. XXX) なる言を以てしたのである。

では最後に、「形而上學」と「先驗哲學」との關係はどうであらうか？ 此の點に關して、カントは例えば「判斷力批判第一序論」の冒頭で、次の様に述べている。——「概念に依る理性認識の體系が哲學(形而上學)に他ならないものとすれば、その場合形而上學は是に依つて既に純粹理性批判とは充分に區別されるのである。即ち純粹理性の批判なるものは、成程かくの如き認識の可能性を哲學的に探究するものではあるけれども、然し夫れは部分として此の様な理性認識の體系に屬するのではない、夫れ所か却つて、批判は先ず以て理性認識の理念を立案し、これを吟味するものである」(Erste Einleitung: P. B. 386. S. 3) と。是に依つてみるならば、我々は、「形而上學」が一應「先驗哲學」とは異なるものと考えべきかも知れない。然し乍ら一步を進めて、此の様に論述するカントの意圖を考へてみると、「批判」に依つて認識能力や其の限界等の批判的原理を確立し、これを「先驗哲學」として體系的に完全なものに迄仕上げる時、夫れは如何なる結果に至るであらうか。云う迄もなく、夫れは實質的にはカントの所謂 „Me-

「*tauphysik*」に他ならないであろう。カントをして、哲學に於けるコペルニクスの轉向と呼ばしめた所の、かの「先驗的認識」なるものも、「批判」乃至「先驗哲學」を成立せしめる可能根據の認識であるばかりでなく、かかる認識が我々の知識を擴大し且つ思惟必然的ならしめる所以のものであり、従つて此の知識の擴大(*Erweiterung*)が經驗に基く事なしに、與えられたものを超越すると云う先天的綜合判斷の構造は、又同時に所謂「*Metaphysik*」をも可能ならしめる所以のものである。我々の斯くの如き推論に若し誤りがないものとすれば、カントに於て「批判」乃至「先驗哲學」なる學が、その成立の事情に於ては「形而上學」の概念と嚴密に區別され乍らも、其の哲學的思索の深まるにつれて、必然的に實質的な區別が困難になつたものと考えられる。斯くして、是等三つの學問は、その探究が深まるにつれて、謂わば「*Kritik*」の徹底化と共に、本質的には悉く合致する必然的な關係構造を有していたと見做し得るのではなからうか。此の様なカント解釋に對する我々の根本的立場からすれば、次に稍々詳細な論述が爲されるであろう所の *Opus postumum* に於て、カントが新に「*Transzendental-Philosophie*」なる概念に依つて、其の全體系を總括せんとした理由も明白となるであろう。更に又一般に、カント哲學を批判哲學乃至先驗哲學と呼ぶことは、單に方法的一特徴を中心とした呼稱に止るのではなくして、本質的には其の全體系をも包括した名稱として承認し得る事を、我々の立場が實證するものと思われるのである。従つて斯かる全體包括的名稱を以て呼ばんとするカントの先驗哲學は又、是を「*Metaphysik als Wissenschaft*」と稱するも同じ事であろう。從來比較的多くのカント解釋者が、「形而上學」に關する面を「純粹理性批判」の中のみ求めんとする傾向があつた様に思われるのであるが、上述の如き我々の究明の結果は、三つの批判書全體が寧ろ此の「學としての形而上學」として、カントの意圖した學問體系であつた事も、我々は今や充分理解し得るものと思う。此の點に關して R. Schmidt は、次の様に論述する——曰く、「以下の原典(即ち三批判書)は合理的形而上學に對するカントの立場 (*Einstellung*) と、此の形而上學から數學を手本として、是と同じ様な資格の學問の意圖——特に此の様な學が如何なる程度に可能であるかを探究せんとす

る所の——に對する洞見を與えるのである。夫れと同じく數學の秘密を探究すべき場所も亦、カントの見解に依つて明瞭である。即ち夫れは、數學的認識が經驗の或る對象に従うのではなく、數學的認識が其の對象自身を特殊な綜合作用に依つて、始めて創造すると云う事實 (Tatsache) にそが其の場所なのである。

カントは此の事態 (Sachverhalt) と、その形而上學的認識の仕方への適用とに對する洞見を、形而上學に於けるロベリクスの轉向と名づけたのである。そしてカントは形而上學の不可避的な課題、即ち神・自由及び不死 (Gott, Freiheit und Unsterblichkeit) に關する問題の爲に、「此の形而上學に於ける轉向に大いに期待したのである」 (R. Schmitz; op. cit. S. 83) 云々。

### 三 最高の立場の先驗哲學

—— „Der Transzendentalphilosophie höchster Standpunkt“ ——

此の表題はカントの、残念にも未完に終つた „Opus postumum“ の思索が深まるにつれて、隨所に見受けられるものである。我々は右に、主として Transzendental-Philosophie (此の意味での「批判哲學」) の概念の考察に重點を置き、間接的に其の根本問題乃至は構造連關を究明して來たのであるが、最後に先の「序論的考察」をも含めて、是等一切の概念規定乃至は根本問題が、カントの最晩年の『遺稿著作』に於ては如何なる結果に終つているか、に就いて考察して見度いと思う。

カントは既に死去する五年前、即ち一七九八年九月に Christian Garve に宛つて、次の様な書簡を送つている、——「私自身が今やそれに従事せんとしている其の課題は、〃自然科學の形而上學的根柢より物理學への推移〃に關するものである。此の課題は解決されるであらう。蓋し、若しもこれが解決されないとすれば、批判哲學の體系に一

つの間隙が残るであろうから」(Kant's Brief an Christian Garve, Sept. 1798. Cr. [X] S. 331 r.)と。<sup>(3)</sup>我々は茲に短いカントの言葉ではあるが、Opus postumum のもと彼の哲學體系に於ける位置と其の動機とを推察し得るのである。即ちカント自身が是を缺く時、「自己」の先驗哲學の體系に「一つの間隙」„eine Lücke“を残すものと稱して、其の晩年の努力を傾け只管これの完成に心血を捧げたものであるから、カント哲學の體系的發展を全過程に亘つて把握し理解せんとする者にとつては、是の考察を省略する事は到底許されないのである。「それ故に Opus postumum はカント哲學を理解する爲の基本的意義を有するものである」(Gerhard Lehmann: Ganzheitsbegriff und Weltdece in Kant's Opus postumum. S. 311 (Kant-Studien, Band 41. Jahrgang 1956) 2) G. Lehmann の語る所以でもある。周知の如くカントに於ける自然哲學の體系に關しては、此の「推移の學」に先立つて既に「自然科学の形而上學的根柢」„Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft“ (1786) と「純粹理性批判」<sup>(4)</sup>とが爲されていたのであるが、それ等は自然認識の「より詳細なる基礎付け」(nähere Begründung)を求める所の、所謂 Metaphysik の特殊部門の探究であつたにしても、而も夫れだけでは、具體的な物理學的認識自體を直接に基礎付ける上に於て、尙不充分的事がカント自身に依つて自覺されたものと思われるのである。今若し此の様な具體的な認識の基礎付けが實現されない限り、未だ智慧の名に値する「形而上學」の體系は完結されないと考えられ、是がカントに於て Opus postumum の動機を爲した「物理學への推移」なる學が、最後に企てられねばならなかつた必然性であろう。『遺稿』の中にも例えば次の如き語句がみられる、——「此の先驗哲學は「自然科学の形而上學的根柢」から始まり、これから物理學へと移行する先天的諸原理並びに其の形式を保有するものである」(op. cit. I Convolut. S. 59.)と。では此の「推移」なる學の爲すべき仕事は何であるか？ カントに依れば、物理學は經驗的探求に依つて其の認識を擴大し、組織付ける意味に於て經驗科學なのであるが、夫れが學である爲には體系的でなければならぬ。而して此の様な體系としての物理學が可能となる爲には、先天的基礎原理が體系的に完結されていなければならぬ筈である。「物質學への推移」なる學

は、實に此の仕事を受けもつべきものであつたと考えられる。

我々が先に引用を試みた所の、G. Lehmann の「カント研究」誌に發表された次の様な論述も、此の點を物語るものであろう。「物理學は此の推移の學なしには、斷片的にして單なる集積に止り、従つて何等の體系も成さないであらう。この故にこそ、まさしく此の推移の學は物理學に之等の體系的統一を保證せんとすることが明かである。物質に對して企てられた基礎體系は、カントが是を『世界體系』と名づけ而もそれは最早、諸部分から全體へと向うのではなくして、却つて全體から諸部分へと押し進められた所の、一つの體系への前段階でさえある」(G. Lehmann: Ganzheitsbegriff und Weltdece in Kants Opus postumum. S. 308)と。そこで問題は此の學の可能性、即ち此の様な基礎體系は如何にして把握されるか、と云う事になる。

此の點に關し、カントは「自然科学の形而上學的根柢」に於て、數學的自然科學の問題を結局物質の運動論 (Bewegungslehre) に還元した様に、『遺稿』に於ける此の「推移の學」に於ても亦、物理學の問題對象を物質の運動に還元して論じている。従つて其處では當然觸發論が問題となる。例えば、「一切を包括する (allbefassenden) 一つの經驗の客體は、自らの中に主觀的に運動し、従つて感性的に觸發しつゝ (sinlich afficirende) 而も諸々の知覺に働く凡ゆる物質の力——その集合を熱素 (Wärmestoff) と稱するのであるが——を保有する……」(Opus postumum, V. Conv. S. 578)と述べてゐるのは、その一例である。此の様に『遺稿』に於てカントは、根源的な知覺對象の可能根據の下に考えられる所の、觸發の問題を探究せんとしてゐるのである。Lehmann も指摘してゐる如く、(Vgl. G. Lehmann : op. cit. S. 314) 我々は茲にカントの考察は物理學から認識論へ、物理學的對象性から物理學的諸對象の知覺領域の究明へ、一言にして云えば、「客體」から「主體」への考察に向けられてゐるのを見るのである。

以上の如き探究が動機となつて、『遺稿』に於けるカントは、これまで不問に附されていた認識の諸問題を或る意味に於て否定し、或はこれを修正乃至は包括する事に依つて、自己の「先驗哲學」の立場を明示せんとする要求が高

まり、後には却つて、此の方面の探究が『遺稿』の中心問題となり、茲に「先驗哲學」そのものの新なる反省を生じ、  
 自己の體系をば更めて「最高の先驗哲學」の立場から、——カントの用いてゐる Titelblatt を是を示すならば、Der  
 Transzendentalphilosophie höchster Standpunct im System der Ideen: Gott, die Welt und der durch Pfl-  
 icht-gesetze sich selbst beschränkende Mensch in der Welt vorgestellt von“ (I. Convolut. s. 59)——最後に總括  
 せんとする企てにまで突き進んだものと考へられるのである。

事實我々は此の「最高の立場の先驗哲學」に關する夥しい規定を、此の「遺稿著作」の到る所に（特に最末期の部  
 分と云われてゐる I. VII. Convolut.“に著して）見出すのである。曰く「最高の立場の先驗哲學は、神と世界を  
 一つの原理の下に (unter Einem Princip) 綜合的に一致せしめるものである」(I. Conv. s. 23)「世界 (die Welt) は——  
 主觀的に思惟せられた自然をも意味する所の——諸々の感性的對象の全體 (das Ganze der Sinngegenstände) を  
 意味する。是等の對象は人格に對立してゐる」(I. Conv. s. 7. s. 30)更に曰く「先驗哲學とは一つの理念論 (ein Idea-  
 lismus) であり、存在する總てのもの (das All der Wesen) 即ち全體性 (Totalität) の體系に基くのである」  
 (I. Conv. s. 63) 等々。斯くて我々は Lehmann の次の如き論述を充分に理解し得る。即ち、「知覺領域の全體的構造は、  
 現象に依る經驗的觸發 (die empirische Affektion durch „Erscheinungen“) が先驗的自己觸發 (einer transzen-  
 dentalen Selbstaffektion) 表現に過ぎないと云う事を前提としており、此の自己觸發の様相として時・空が現われる  
 のである。従つて時・空は全體さえも形成するのである。世界と云う全體は其の對立部分を神と云う理念の下に見出  
 すのであり、神と世界と云う此の二つの理念を綜合的に一致せしめることが、先驗哲學の最高の課題 (die oberste  
 Aufgabe der Transzendental-Philosophie) なのである。即ち、人間とはそれに依つて神と世界が一つの命題の下に  
 結びつけられ、絶對的な全體 (absolutes Ganzes) として組み立てられる所の繫辭 (Copula) なのである」(G. Lehmann  
 : op. cit. s. 308) と。茲まで來ると、人は最早や『遺稿』に於けるカントの探究がその最初の動機をなしていた所謂

カントに於ける „Transzendental-Philosophie“ の理念に就いて

「運動力の基礎體系」としての推移なる學とは、かけ離れたものとなつてゐる事に氣付くであろう。即ち夫れは單なる自然哲學の一部門を受けもつに止るのみでなく、かの先驗的方法を更に深めて反省し、その全體系を新たに統一包括せんとする要求にまで進展してゐるのである。

然し乍ら、我々は此の『遺稿』の中にカントの此の様な立場が、完全に而も矛盾なく、完結してゐると考える事は困難であろう。例えば一例をかの觸發の問題にとつてみても、上述の如くカントは是を結局、主觀自體の „Selbstaffektion“ の思想に到達してゐるのであるが、然し元來此の『遺稿著作』に於ける觸發論は、その探究動機からも了解される様に、物理學的認識を對象として考えられたものであるが故に、Lehmann も指摘せる如く夫れは結局經驗的觸發 (die empirische Affektion) に止るのではないか。従つて、これを「自己觸發」にまで轉換發展せしめて先天的なものにしようとしても、そこに大きな困難を伴ひ、又先天性の不當な擴張が存しはしないであろうか？<sup>(4)</sup>

カントが此の「遺稿」の起草に取りかつたのは、彼の七十歳から八十歳の間であつたと考えられてゐる。その高齡の故にそこには種々の立場の混合と、問題の錯雜が見出されるとする解釋も成り立つかも知れない、例えば Adickes の如きはこれに屬するであろう (Vgl. Adickes : *Kants Opus postumum* S. 315)。又 R. Schmidt は亦此の『遺稿』に對する批評の中で次の様に語つてゐる。即ち、「此の思想は成程彼 (カント) の精神的な眼の前には、その様なものとして明白であつたであろうが、併し是を個々に亘つて發展さすには、最早やその力が充分ではなかつたのである。……これらの寫しの状態からして、その内容と之等の覚え書きの老人らしき結果に對して、我々が異議を唱えんとする場合、人は全く途方にくれて了うのである」(R. Schmidt : *op. cit.* S. 500) と。實際、根氣強く此の『遺稿』に目を通した事のある人々は、既にカント自身をして、——「老衰は甚しい、人は己れの心情力及び身體力を保持せんが爲に、單に機械的に仕事に向う事を餘儀なくされる」(1794年 Reinhold に宛てた書簡)「私が哲學の全體に關する事柄を考慮する時、その終結を目前にし乍ら、而もどうしても是の完成を見る事は出來ないのである。……夫れにも拘わら

ず私は尙希望を失つてはいない」(1798年 Garve に宛てた書簡(R. Schmidt : op. cit. S. 488))——と慨嘆せしめる程の老境に踏み込んだカントが、此の『遺稿』に於て提出した諸問題に終局の完成を與え、夫々の導く結論相互の矛盾に悩みつつも、自己のこれ迄の哲學上の立場から、之等を統一し解決せんが爲に慘憺たる苦心を重ねている痛ましい姿を看取する事が出来るであらう。而も我々は之をカントが残した文献上の哲學のみではなくして、寧ろ彼が眞に意圖したてもあらう哲學の發展から考へる時、カントが既述の如くその最晩年に至つて自己の哲學を「最高の立場の先驗哲學」と規定しつつ、其の意義を再自覺し、そこから全體系を統一して是に最終の完成を與えんとした事は、極めて注目に値すると共に又畏敬の念に堪えないであらう。

此のことは一見、最初の「Kritik」の立場に歸つた觀があるが、夫れは決して單なる後退ではない。「批判」は我々が先にみた如く、豫備的事業であつても、決してその目標ではなかつた筈である。是は實に、先驗哲學に依つて保證された「Weisheitslehre」としての哲學に歸らんとするものであり、その意味で Metaphysik als eine Wissenschaft の水路に向つて退けることの出来ない人間の形而上學的欲求を導かんとする「Transzendentalphilosophie」の概念に歸還したものと云うべきではなからうか。

而も問題は單に此の點にのみ止らないであらう。我々はカントが此の遺稿に於て、如何に彼の哲學的な眼を「全體概念」Ganzheitsbegriff に向けているか、と云う事を洞見し得るのである。かの「批判的事業」そのものも結局は此の全體性、即ち一切を包括する先驗哲學の企畫を通じて、始めて其の本來的王冠を得るのであらう。夫れは純粹理性存在に對する素質から、必然的に發現し來る理念界の企畫であつて、カントの意圖は寧ろ、たとえ人々がその存在を信じようが信じまいがとも角、斯くの如き實踐的、理念に於て己れ自らを知り、その限定を認め而も斯る限定を展開せんが爲の通路(Wege)を知らんとするが如き鏡を提出することであつた。まことに、謂わば斯くの如き鏡が「あるがままに此の世界に方向を與える事、夫れがあるべきまゝに世界を方向づけること、——是こそ、カントの哲學的全努力

を傾注した核心である」(R. Schmidt: op. cit. S. 502) 従つて此の『遺稿』に於けるカントの「全體性」への眼差しは、一方では人格的存在として一種の「神的存在」(ein göttliches Wesen) であり乍ら、他方に於て「世界存在」(ein Welt-Wesen) である云う此の二重の異質的構造を有する「人間」(der Mensch) は、此の世界に於て如何なる本質的構造を有するのであるか?——と云う點に向けられてゐるのである。成程、夫等は R. Schmidt も指摘する如くカントの高齡の故に、「明かに斷片的な形と、反復の冗長さに於て表現されて」(op. cit. S. 500) 是の如く。而も右にみて來た様に、その故に彼の主張の或る部分に於ては、確かにカントの毫釐を物語ると思われるしどろもどろの個所もなしとはしない。然し乍ら夫れにも拘わらず、此の様な問題設定 (Fragestellung) の方向に於て、哲學する事が義務であるとまで云い乍ら高齡に鞭打ち、其の行きつく所、遂に「眞理狂」(Wahrheitsfanatismus) に迄昇じて行つた哲學者カントの探究の發展そのものは、哲學の理念に於ける究極學的並びに究極體系的要求を追求してやまなかつた必然性として、カントの哲學を先ず其の全き姿、その意味で「全體性」に於て把握せんとする我々の立場の、決して輕々しく看過することを許さない所である。カントは此の様な「世界理念」の結構並びに全體性の概念を、第一・並びに第七卷東で巧みにも明確に描出してゐるのである。例えば、「存在する總てのものは神と世界である、——我々は凡ゆる對象を (Spinoza に従つて) 神に於て直觀する。同様に我々は之等總ての對象が其の實在性の上から云つて、此の世界に於て出會わねばならないであろうと云うことが出来るのである。即ち、最初のもの (世界) は技術的——實踐的理性に依つて、他 (神) は道德的——實踐的理性に依つて。」(I. Convolut S. 43) 然し乍ら Lehmann も云つてゐる様に、「これは未だ究極の言葉ではなご」(Vgl. op. cit. S. 329) であろう。更に問題は此の思惟する世界存在としての人間 (Der Mensch als „denkendes Weltwesen“) が、技術的——實踐的理性と道德的——實踐的理性とのからみ合いの下に、始めて理念論 (Ideenlehre) に結合するのである。即ち、「神と世界とは其の各々が一つの絶對的な統一を保有する所の、二つの異つた唯一存在として存在するのみならず、又絶對的な獨立性をも保有するのである。多くの神々

が思惟する事の出来ないのと同じ様に、多くの世界も亦存在するものでもない。却つて寧ろ、一方は他方の中に住うのである (sondern es wohnt eine in Andern)。兩者は異質的なのである。一方は又他方の Organ でもない」(I. Convolut, S. 140-1) —— 又は Weltidee の構造に就いてカントの語る究極の言葉である。まづ次に「神」(als Inbegriff der alles umfassenden Weisheit) と「世界」(als Inbegriff höchster systematischer Ordnung)、『そして「我」(als Inbegriff des reinen Vernunftwesens) —— 是等のものは理念の „Dreieinheit“ であり、吾人はその實在性を時・空の中に求める事の許されないものである。人間とはまさしく、「神」と「世界」と云う此の理念を超えて、而も理念として立つてゐるのであり、更に彼は「physisch にして同時に moralisch, praktisch な理性の理想を、感性と客體という一つのものに合致せしめる」Zoroaster に他ならないのである。(I. Convolut, S. 4) 茲に至つて私は本論文の結論を前にして、„Drei Kritiken“ に於ける R. Schmidt の次の如き感激に満ちた言葉を以て結び度いと思う。即ち、「此の哲學者 (カント)こそ、言葉の最上にして批判的に淨化された意味に於て、世の物事の判つた人 (ein Weltweiser) であり、云うならば世界觀察者 (ein Weltbeobachter) であり、神探究者 (ein Gottsucher) であつた」(S. 502) と。

## 結 語

以上述べて来た所に依つて、„Schulbegriff“ と „Weltbegriff“ に端を發して、三批判の „Kritik“ „Transzendental-Philosophie“ „Metaphysik“ の本質的構造並びに相互關係の究明を經過して、最後に Opus postumum に於ける最高の立場の „Transzendentalphilosophie“ (Metaphysik als eine Wissenschaft) の諸問題の探究に従事して来た所の、可成り永きに亘る我々の論究は終つた。我々の辿つて来た其の Wege は、之を一言にして云うならば、現に

歴史的に與えられているカントの哲學のみではなく、彼が意圖したでもあろう所の諸問題の究明に重點が置かれたのであつた。従つて先ず、カントの掲げた哲學の一般的概念（理解）を示す „Schulbegriff“ と „Weltbegriff“ を彼自身の意向に即して、而も出来る限り正確に理解する事が試みられた。次に此の哲學の一般的規定に、謂わば具體的な肉付けを行つた所の哲學の概念である、「批判」・「先驗哲學」並びに「形而上學」の基本的性格を究明して、我々は其處に之等三つの學問がカントの意圖の上から云つて、夫々切り離す事の出来ない關係構造を有しているのを見た。斯くの如き究明の結果は『遺稿』に於て到達したカントの「最高の立場の先驗哲學」の結構や、これに至るまでの發展の必然性を理解する上での前提として、我々には缺く事の出来ないものであつた。此の故にこそ、我々が此の論文に於て絶えず顧慮した點は、問題を單にカントの抽象的形式的な論述の穿索に終らしめる事なく、常に何らか其の内容的必然的な關連に於て其の意義を求めたのであり、之等を通して結局カント自身の内にひそみ、そこに働いているもの、即ちカントが抱いた哲學の理念を、其の「全體性」に於て把えんとするものであつた。我々は此の様な着眼點がカントの批判前期の諸論文の中にも、既に實際に存在していたのを知つている。そして更に我々は既述の究明を通じて、批判期の特殊な問題設定の中にも斯くの如き着眼點に遭遇した。而も此の様なカント哲學の體系產出力としての理念は、カントの後期の諸論文、就中 *Opus postumum* の中に、充分に展開されている事をも我々は知つたのである。斯くして最後に、我々はもう一度云おう。哲人カントをして斯くも偉大ならしめたものは、彼の先驗哲學に於ける原理的な認識方法に在つたのではなく、まことに寸陰を惜んで夫れと取り組んだ、人間性の苦惱に深くつながる所の彼の「最高の立場の先驗哲學」の諸問題、即ち「神」・「世界」・「自由」そして「魂の不死」の問題に在つたのである。——と。

(丁)

(一) „Schulbegriff“ 並びに „Weltbegriff“ の譯語については、二、三の種類のものが見受けられ、是等のものは引用する前後の關聯からも統一ある譯語に就いて、多少の疑問もなしとしない様に思われる。茲では取り敢えず天野貞祐氏の譯語に従つて

おく。文字通り「學校概念」「世界概念」と譯している方もあれば、此の言葉のカントの意味する所を汲んで「哲學の技術性」(或は「技術哲學」)「哲學の大衆性」或は「世界市民的哲學」)と譯しておられる方もある。(例えば濱田與助著「カント哲學」の存在論的一考察)同志社大學哲學年報第一輯(昭和十三年弘文堂刊行)。要するに是等の言葉の意味する所は、此の論文が進むに従つて幾分明らかにされると思われるが故に、統一ある適當な譯語も見當らぬまゝに便宜上今後は、なるべく原語を使用する事にし度い。

(2) Schmidt は右の書物に於て「カントの「形而上學」を Verstand の方法論的究明、即ち謂わば存在論的發展を有する悟性の性格の機能と構造との關聯に於て究明し、この論述に「自然の素質としての形而上學と健全なる人間悟性」(Metaphysik als Naturanlage und der „gesunde“ Menschenvernuft)なる表題を附してゐる。(S. 93~103)そして、此の論述過程に於て彼は「數學から形而上學へ」(zur Metaphysik von der Mathematik)と云う表現を用いてゐるのであるが、此の言葉に依つて我々は直ちに、Schmidt のカント解釋が、如何なるものであるかを察知する事が出来るであらう。即ち彼の解釋の根本方向は、カントに於ける純粹悟性の機能と構造とを、數學に於ける先天的綜合判斷の中に、探究解釋する所に「批判」の Aufgabe が存し、將來の學としての形而上學に對する準備、乃至は因習(die Vorübung)たる根本性格が存するものと云い得るであらう。私の此の論文も、基本的には Schmidt の此の見解に同意すると共に、何れかと云えば、彼の文献的研究の成果に多大の援助と示唆を得ている事を附記して置き度い。

(3) 同年の十月、是と大凡同じ主旨の書簡が Kieseetter に對しても送られてゐる。(Vgl. Kant's Brief an Johan Gottfried Carl Christian Kieseetter. Okt. 1798. S. 353)

(4) カントの「觸發論」については「これだけを取り出ししても極めて重要な諸問題を孕んでおり、従つて哲學的には色々な立場から追求されるべきであり、現在も尚未解決の問題であると云い得るであらう。従つてカントに於ける此の「自己觸發」の問題も今後私の取り組むべき重大なものの一つだと思つてゐる。現在、私は此の問題に關してまとまつた考えも持ち合わせていないのであるが、元來、カントに於ける「觸發」の問題は究極的には「物自體」の概念を豫想するものであり、之の詳細な研究は特にカントの『純粹理性批判』に於ける「演繹論」と「分析論」の内面的相互關係の構造を、而もカント哲學全體の立場から解明せずしては理解されなであらう。そこで私に思い出されるのは、カントが綜合の能力として構想力を持ち出し、此のものに、我々の感性と悟性とを結合すると云う重要な機能を與えた事である。自己觸發の理念に於て純粹自發性として考へられた主観は、常に何處までも有限な主観でなければならぬ。然し乍ら、かくの如く我々が内的に「觸發される」が如き

仕方でも、果して我々は自己を直観し得るのであろうか？ 一體我々は己れ自らに對して受動的な態度をとり得るのであろうか？ 抑々斯くの如き自己觸發は如何にして可能なのであろうか？——この様に考えて來ると、我々は最早やカントに満足して止るわけには行かない様に思われる。カントの「演繹論」が作り出した様に、内官 (innerer Sinn) が何處までも「統覺」の統一の下に立ち、それ以上のものから導き出され得ない様な根據から、内官に於て與え得る多様の制約一般としての時間が、内官の根柢に存する——という考え方を以てしては、決して内官に於ける經驗的自己觸發 (eine empirische Selbstaffektion in innerem Sinn) は可能ではないであらう。蓋しその場合、自己觸發は先天的に、先驗的的自己觸發の根柢に存するものでなければならぬからである。ここから例えば、Hermann Mörchen は其の著「カントに於ける構想力」(Die Einbildungskraft bei Kant: Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, elfter Band, Halle 1930) に於て、カントが自己觸發の理念に於て指示せんとしたものは、次の如き二重の同等な根源性 (eine doppelte Gleichursprünglichkeit) であつたとしている。即ち、①内官に於てめぐり會う (Begegnen) 所の存在者に對して、我々は既に外界に對するのと同じ仕方で開示されていないからならぬ、と云う事。②結合する (自發的な) 自我は、本質的に既に會合一般 (Begegnendes überhaupt) に對して開示されていると云う事。——これである。そして彼に依ると此の場合に重要なものは、後者のものの關係であり、而も此の様な二重の意義は、内官の優先的地位 (Vorzugsstellung) から説明されると爲している。(Op. cit. S. 413-4. II. Abschnitt, 4. Die Bedeutung der Einbildungskraft für das Grundproblem der Deduktion) 然し乍ら明らかに、カントが此の様に云つてゐるのでもなければ、又斯くの如く問題設定 (Problemstellung) をなしてゐるのでもないであらう。カントに於て、主観性の根本構造の調和性 (統一性) (Einheitlichkeit) は、Mörchen も云つてゐる様に、必ずしも明確ではなく、少し極端な云い方かも知れないが、まさに「自己觸發」と云う事を持ち出しているにすぎない、と云い得るかも知れない。此の意味に於て我々はカントを超えて行かねばならぬであらう。

(筆者 同志社大學院文學研究科「哲學」博士課程學生)

is not able to be proved (cf. *Ālambanaparīkṣā*). According to his opinion, what is known by means of direct knowledge is nothing else than the objective moment appearing in the consciousness correlatively with the subjective moment. We have thus to notice that Dignāga's theory of knowledge is closely related with his Vijñānavāda philosophy.

\* For the Japanese original of this article, see Vol. XL, No. 4 & 5.

## Über die Ideen in der „Transzendental-Philosophie“ bei Kant

von Tsuruo Imazu

Was für eine Philosophie war es, worauf Kant eigentlich abzielte? Um diese Frage zu beantworten, legte ich in meiner Kantauslegung nur die Aufgabe auf, seine metaphysische Probleme von „Gott“, „Welt“ und „Ich“ nicht nur nach seinen eigenen Darstellungen, sondern auch sachlich zu untersuchen. Ich fand dabei einen Anhaltspunkt in seiner bekannten Unterscheidung zwischen zwei Philosophiebegriffe: ein „Schulbegriff“ und ein „Weltbegriff“. Ich versuchte zuerst seine Auffassung dieser Begriffe kurz darzustellen, und dann befaßte mich mit dem ursprünglichen Unterschied zwischen der naturwissenschaftlichen (mathematisch-physikalischen) und der philosophischen (metaphysischen) Erkenntnis, um den Erkenntnischarakter der letzteren zu erörtern.

Weiter erforschte ich die Kantische Begriffe von „Kritik“, „Transzendental-Philosophie“, und „Metaphysik“, und wollte dadurch den Charakter seiner Philosophie bestimmen. Das Ergebnis meiner Untersuchung war folgendes: Diese drei Begriffe unterschieden sich voneinander in den Anfängen des Kantischen Philosophierens, später aber gingen sie so untrennbar ineinander ein, daß es trotz einer eingehenden Analyse nicht möglich ist, sie aus diesem System als selbständige Begriffe herauszunehmen.

Zum Schluss dachte ich ausführlich über das Opus postumum Kants nach und stellte Betrachtungen darüber an, wie alle Grundbegriffe, die ich im Vorausgegangen zu erfassen versucht habe, in seinem letzten Werk erhalten geblieben sind.